

新潟県立看護大学学長研究費 個人研究業績報告

ヘルス・コミュニケーションの考えにもとづいた健康教育の方法についての検討

研究者 徐 淑子
新潟県立看護大学

Health Communication and Health Education Practice
Sookja SUH
Niigata College of Nursing

キーワード：ヘルス・コミュニケーション（健康教育，保健行動）

目的

ヘルス・コミュニケーション概念は、社会科学におけるコミュニケーション研究の知見を、より適切に保健医療実践と結びつけようという考えを背景としている。本研究では、ヘルス・コミュニケーションの概念を、社会背景、健康教育実践との関連等に注目しながら検討することを目的とした。

研究方法

ヘルス・コミュニケーションの定義、位置付け、実践応用の範囲について、成書、論文、抄録をもとに文献検討を行った。

結果および考察

1. ヘルス・コミュニケーションの概念

ヘルス・コミュニケーションとは、健康および健康に関連する諸行動（保健行動）について「個人や組織、一般のオーディエンス（働きかけの受け手）に情報を与え、影響をおよぼし、行動を動機づけるための熟練技術(art and technology)」¹⁾である。

ヘルス・コミュニケーションということばは、当初、「個人が健康関連問題にどのように対応するかに関連したヒューマン・コミュニケーションの部分集合」であり、「健康に関連したあらゆる種類のコミュニケーション」を含むものとして、保健医療サービスにおける対人面での諸問題を論じ、整理する枠組みとして使われ始めた。その文脈では、医療者－患者関係、医療者間における葛藤とコミュニケーション、小集団を対象とした介入におけるグループ・プロセスなどが主たる関心事とされ、コミュニケーション理論の知見から実践への示唆や、知見応用への試みが検討されてきた²⁾。

ヘルス・コミュニケーションという用語が、保健医療サービスにおける対面的状況でのコミュニケーション的課題に限定せず、個人および集団の行動や行動についての決定に影響を及ぼす「介入の手段・技術」としての、広い意味をもつようになったのは1990年代に入ってからである。広義のヘルス・コミュニケーションは、1998年にはWHOのHealth Promotion Glossaryに登場し、また、米国のHealthy People 2010ではひとつの章を割り振られ、行動指針が提案されている。第3項に記すとおり、これらにおけるヘルス・コミュニケーションの捉え方は、対人レベルに限定することなく、健康キャンペーン等社会レベルをふくむ保健医療サービスのあらゆる水準を対象としている。昨今の通信情報技術の発展を背景としたTele-Healthに言及しているところも特徴的である。

ヘルス・コミュニケーションに関連した議論では、エビデンスにもとづいた計画性、送り手（働きかけ主）と受け手とのあいだの双方向性の確保等が強調されており、研究および実践双方の重視、また、基礎研究を実践応用へと「翻訳」する中間ステップの研究の充実が指摘されている。

2. ヘルス・コミュニケーションの枠組みに含まれる保健・医療的課題の範囲および対象

ヘルス・コミュニケーションの枠組みに含まれる領域は、おおむね、つぎの8つに分類される。①医療専門家－患者関係、②個人の健康情報への公開、探索および利用、③個人の臨床上の助言や処方へのアドヒアランス、④公衆衛生メッセージおよびキャンペーンの構築、⑤個人や集団の健康リスクについての情報普及（リスク・コミュニケーション）、⑥健康についてのイメージづくり、⑦医療消費者教育、⑧テレ・ヘルスの活用³⁾。コミュニティや個人を対象とした行動変容プログラムのほか、advocacy（代弁と世論形成）やempowerment（個人やコミュニティの有力化）など社会環境 social climate づくりにおける実践例や実験的研究が数多く報告されている。

3. 社会的背景

保健医療介入においてコミュニケーション要因が重視されるようになった背景には、社会および文化的多様性(social and cultural diversity)およびそれに起因するサービスアウトプットの不均衡の問題がある。政策・経済上の問題の他、対象の多様性に配慮しない一元的な保健医療介入が対象間で社会的不利益を生じさせているのではないかという倫理性への議論から、対象集団の明確化・個別化、対象に受け入れやすい健康メッセージの開発、コミュニケーション・チャネルの確保により、多様な対象の特性に合わせた働きかけを計画し、より確実に介入の目的を果たすという発想へと発展した。

4. 健康教育との関連

Green, L. W.によると、健康教育とは、「個人、集団、コミュニティの健康に資するような自発的な行動が起きやすくするよう条件を整え、その行動を可能にし、強化するようデザインされた複数の学習経験を、計画して組み合わせたもの」⁴⁾である。つまり、健康教育という枠組みでは「周到に用意された学習プロセス(learning process)」という側面が実践の核心をなす。また、通常、「健康教育」といった場合、学習プロセスは構造化(健康メッセージ、カリキュラム・学習目標、指導者と対象者との役割関係性、教室という場面、教材 etc.) されている。ところで、学習プロセスとは、いうまでもなくひとつのコミュニケーション・プロセスである。手段としてのヘルス・コミュニケーションと健康教育との接点はこの部分で生じる。適切なヘルス・コミュニケーション戦略の選択は、健康教育の、対象や状況に応じたフレキシビリティを高める。エイズ・家族計画分野等でさかんな IEC/BCC(Information, Education, Communication / Behavioral Change Communication)は、オーソドックスな健康教育のもつ「構造」を取り払いつつ、「情報を与え、影響をおよぼし、行動を動機づける」コミュニケーション戦略を活用することによって、hard-to-reach communityへの接近を試みる実践である。

5. ヘルス・コミュニケーションに援用されている理論枠組み

ヘルス・コミュニケーションの考えでは、エビデンスにもとづく計画的なプログラム施行が強調されている。援用される理論枠組みには、社会心理学、社会学等の知見にもとづく保健行動論、コミュニケーション理論およびマーケティング理論である。それらは、①説明・予測、記述・解釈的モデル、②治療・介入的モデル、③社会診断・社会構想的モデルの3つに大分類できる。

6. 効果あるヘルス・コミュニケーションの特徴

成功しているコミュニケーション・プログラムの特徴として、つぎのような点について議論されている。①推奨される保健行動についての強固な科学的基盤、②推奨される保健行動が、対象となる集団において現実的なレベルで採用可能であること、③他の関連する健康プログラムとの連携が図られていること、④じゅうぶんな資源が、ヘルスメッセージの開発と普及に投入されており、ターゲット・オーディエンスが(効果出現に)必要な頻度で健康メッセージに触れることができていること、⑤変化が緩慢な場合にプログラムを長期間維持できるよう、じゅうぶんな資源が確保されていること⁵⁾。

また、米国 CDC は、効果あるヘルス・コミュニケーションの10のステップとして、調査-計画-実施-モニタリングのサイクルをモデル化している⁶⁾。

結論

ヘルス・コミュニケーション概念は、1990年代以降、個人および集団の行動や行動についての決定に影響を及ぼす「介入の手段・技術」としての広義に使用されるようになった。ヘルス・コミュニケーションについての議論およびそれにもとづく実践では、社会科学におけるコミュニケーション研究の知見の援用、エビデンスにもとづいた計画性、対象の多様性への配慮等が重視される。手段としてのヘルス・コミュニケーションは、健康教育のフレキシビリティを増強し、対象への接近性を高める。

文献

- 1) Ratzan, SC. Communication - The key to a healthier tomorrow. American Behavioral Scientist 1994;38(2):202-207.
- 2) Northouse LL & Northouse PG. Health communication-Strategies for health professionals. UK:Preneice-Hall; 1998. P.1-20.
- 3) U.S. Department of Health and Human Services. Healthy People 2010. 2nd ed. With understanding and improving health and objectives for improving health. 2 vols. Washington, DC: U.S. Government Printing Office; 2000.
- 4) Green, LW & Kreuter, MW. Health Promotion Planning: an educational and ecological approach 3rd ed. CA: Mayfield Publishing Company, 1999.
- 5) Institute of Medicine(U.S.), Committee on Communication for Behavior Change in the 21st Century. Speaking of health : assessing health communication strategies for diverse populations. NY: National Academies Press, 2002. p.76-126.
- 6) Roper, W. L. Health communication takes on new dimensions at CDC. Public Health Reports, 108(2), 179-183.